

「しるきこと」考：『蜻蛉日記』天禄三年二月の記事

川原田， 祐子
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/8943>

出版情報：語文研究. 94, pp.41-52, 2002-12-26. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



「しるきこと」考

——『蜻蛉日記』天禄三年二月の記事——

川原田 祐 子

一、「しるきこと」の意味

道綱母が迎えた養女は、夫兼家と源兼忠女の間生まれた娘であった。道綱母は養女の誕生にまつわる記事をその母親と兼家の交渉とともに回想するが、その記事を語る途中、「しるきこと」という一語を差し挟む。

さていかがありけん、

せきこえてたびねなりつるくさまくらかりそめには

たおもほえぬかな

とかいひやり給ふめりし、なほもありしかば、返り、こ
とぐくしうもあらざりき。

おぼつかなわれにもあらぬくさまくら又こそしらね
かゝるたびねは

とぞありしを、「たびかさなりたるぞあやしき。などもとんとに」とてわらひてき。のちくしるきこともなくてやありけん、いかなるかへりごにか、かくあめりきをきそふるつゆによなくぬれこしはおもひのなにかはく袖かは

などあめりしほどに、まましてはかなうなりはてにしお、
cのちにきくしかば、「ありしところに女子うみたなり。さぞとなんいふなる。さもあらん。こゝに取りてやはおきたらぬ」などのたまひし、それななり。させんかんしなどいひなりて、たよりをたづねてきけば、この人もしらぬおさなき人は十二三のほどになりけり。

(傍線・記号は引用者。以下同。猶記号に関しては後述。)
(一四七段・一七七頁・下・天禄三年二月)^(注)

兼家が娘の誕生を知ったのは兼忠女と別離した後だった。交際期間中に「しるきこと」が起ころぬまま、二人の仲は絶えたのである。「しるきこと」は現行諸注において「目立つような出来事」「目立つたこと」という通釈が付され、それが何の不都合もない表現として扱われてきた。しかしながら、この「しるきこと」という表現は私見によれば、『蜻蛉日記』においてこの養女迎えに関わる固有の事情を潜めた語であった。

当該箇所 異文に関しては、桂宮本をはじめ学習院本・阿波国本・松平本など祖本に最も近いとされるA系諸本は「しるきこと」で共通する。^(注2) さてその解釈であるが、管見によれば、諸注でこの「しるきこと」について右の解釈以上に踏み込んだ内容を持つものは見あたらない。天明五(一七八五)年刊の坂徴の著『かげろふの日記解環』では、引用記事に先立つ夢解きと引用文中の「などもろとんに」についての言及があるが、「しるきこと」には全く触れられず、それは文政九(一八二六)年成立の『かげろふの日記解環補遺』(田中大秀)でも同様である。降って、与謝野晶子は「著るしい刺激を受けた事^(注3)」と訳したが、それでも具体的な中身は浮かび上がってこない。

なるほど、「しるきこと」を特に具体的な何かを定めず、

単に目立ったことと一般化してやり過ぎすこともできよう。しかし、この文脈が道綱母にとつて養女迎えという後半生の一大事に関わる記事であることを考えたとき、そこに単になにか出来事という一語が差し挟まれるのはいささかの違和感を感じる。はたして、自らの後半生に深く関わる養女の、その誕生した経緯を語る途上において、具体的説明のつかない曖昧な表現が必要だろうか。

兼忠女と兼家との仲が順調ではなかったことを示すためだけに、兼忠女の後の歌「をきそふる」を見るだけでも窺えるし、もしくは、「しるきこと」を除いた「のちくいかなるかへりごとにか」で十分意味は通じる。従って、「しるきこと」が叙されたという事実は、そこにくみ取るべき意味が込められたということも同時に表しているよう。

こうした事象は『蜻蛉日記』に限らない。たとえば、『源氏物語』桐壺巻において益田勝実氏は「かぎりあれば」の一文に注目し、それが単に「物には限度があるから」ということを意味するのではなく、帝王以外の者がそこで死ぬことはできないという「宮廷の厳然たる掟」であることを指摘した。この厳密な解釈により、氏は危篤の桐壺更衣退出をはばみえないのは桐壺帝自身の帝王としての神聖性であるという矛盾を明確に導き出した。^(注4)

右のような、語の意味を最大限正確に読みとる作業は、作品その場面の解釈を深めるために不可欠であり、それは常に厳密を期されなければならない。翻って、『蜻蛉日記』のこの語についても今まで正確な読みがなされてきたかと考えたとき、そこには疑問が生じる。

なぜ「しるきこと」はこれまでの注に見逃されてきたのだろうか。その原因は、「しるきこと」と含むこの文脈の叙述にあると思われる。「しるきこと」の前後には三首の歌が配されるが、それらの歌からも看取できるように、右の引用部分を読む限りこの一連の叙述は兼家と兼忠女の恋愛話の回想という形を取る。「しるきこと」はこの話のなかに埋没したため、その真に意味するものが見えなくなり、その結果今まで見過ごされたのではなからうか。

では、つまるどころ「しるきこと」とは何を意味するのか。私見によれば、ここに呼び出されるべきは「養女迎え」の根幹をなすもの、すなわち兼忠女による養女の懐妊もしくはその兆候でなければならぬ。

二、「しるし」の意味するもの

ここで問題の「しるきこと」のなかで、特に焦点となる形

容詞「しるし」についての用例を検討しよう。この手続きによつて「しるし」の持つ語としての特性が姿を現すはずである。

「しるし」ですぐに想起されるのは次の歌であろう。

和餓勢故餓、勾倍枳豫臂奈利、佐磋餓泥能、區茂能於虚
奈比、虚豫比辭流辭毛

（わがせこがくべきよひなりさがねのくものおこなひ
こよひしるしも）

（『日本書紀』^{注6} 允恭八年二月・歌謡六五）

蜘蛛の巣をかける様子のはつきり見るところから判断して、今宵の夫が訪れそうだという歌である。

次いで、『万葉集』^{注6}にも多く登場する。例えば、

秋野之 草花我未乎 押靡而 来之久家知久 相流君可
聞

（あきののをはながうれをおしなべてこしくもしるく
あへるきみかも） 一五八二番（一五七八番）

は秋野に咲く尾花を押し分けてやって来た甲斐があつて、恋人に逢うことができたの意。

また他にも、勅撰集私家集の別を問わず数多く見つけることができる。

朱雀院の女郎花あはせによみてたてまつりける

をみなへし吹すぎてくる秋風は目には見えねど香こそし
るけれ (古今和歌集巻第四秋歌上・二三四番)

同五年亭子院御屏風のれうにうた廿一首

吹く風のしるくもあるかな荻のはのそよくなかにぞ秋は
きにける (貫之集第四・五一一番)

このしじやう、おなじ女のもとにまかりたりけるに、
をんなのけしきやいかがありけん、たちながらまか
りかへりて、又のあしたに

ねてゆけといふ人もなきあきのよはたもとにおきしつゆ
さへぞつき
かへし

いろにいでていはねどしるきことのはにかからぬつゆや
つらきなりけん (一条撰政御集三〇番)

は秋風に女郎花の香りがはつきり分かるの意、は風が
吹くのがはつきり分かるの意、は口に出して言わなくても
それと分かるはずの言葉。

以上はごく一部に過ぎないが、個々の歌を通覧すると「し
るし」とされるものは蜘蛛のふるまいや秋風などその対象は
実にさまざま、個々の状況にに応じて千差万別といえる。逆に、
これらの例からは共通して、「しるし」の対象は常に何らか

の具体的意味を帯びるという特性が浮かび上がる。もしくは、「しるし」はいつも何らかの具象物を際立たせようとしているともいえる。の場合も目に見える具象物ではないが、何を言いたいのか瞭然としていよう。この、「しるし」によって際立たせられる対象は常に具体的意味を伴うという現象は散文においても例外ではない。一例として『大和物語』^{（註）}。

かくいひける心ばへは、親など「男あはせむ」といひけれど、「一生に男せでやみなむ」といふことを、よとともにいひける、さいひけるもしるく、男もせで、廿九にてなむ、うせたまひにける。(『大和物語』一四二段)

女は「一生夫を持たない」という自らの言葉通りに生涯を終える。また『枕草子』。

さし櫛磨らせたるに、をかしげなるもまたうれし。またもおほかるものを。日ごろ月ごろしるき事ありて、なやみわたるがおこたりぬるもうれし。思ふ人の上は、わが身よりもまさりてうれし。(「うれしきもの」二五八段)^{（註）}
は「目立った病状」の意。「しるき事」のすぐ後に「なやみわたるがおこたりぬる」と続くため、「しるき事」の持つ意味は判然としていよう。そして『宇津保物語』。

異人もあまた聞こゆる中に、五の宮より切に聞こえ給ふ。宮より聞こゆるほどに、一の宮の御心地を、かかる筋に、

大将見なし給ひて、「さりとも、しるく思さるらむものを、のたまはせで、心魂を惑はかさせ給ふものかな。なほなほ、かくこととしき御心こそ…」

(国譲中七一四頁)^{注9)}

は仲忠が女一宮の懷妊を知る場面。

さて、ここまで見てきて「しるし」の特性は改めて確認できたのではなからうか。すなわち、「しるし」は訳をつけるとすれば「はつきりとした、目立った」という訳にならうが、それが用いられるときはいつも何らかの具体的事象がその後にある。何が「しるき」なのか「しるく」あるのは何なのか、それは常に明確な対象に使われる。もしくは、のように、その文脈が「しるし」の対象を指定する。つまり、「しるし」は、個々の文脈に即した具体的な意味内容と常に不可分な関係にある。

次に「蜻蛉日記」を見ると、作品中六例の「しるし」が見つかると(当該例除く)。そのすべては、次のように慣用的な言い回しとなる。^{注10)}

…まめやかにかなしうなりて、車よするほどに、かくいひやる。

などがくるなげきはしげさまさりつゝ人のみかるゝ宿となるらん

かへりことは、おとこそしたる。

おもふてふわがことはをあだ人のしげきなげきにそへてうらむな

などいひおきて、みな渡りぬ。思ひしもしろく、たゞひとりふしをきす。

(一五段・四八頁・上・天曆一〇年三 四月)

右は、兼家が町小路女に公然と通い出した後同居していた姉が転居し、道綱母が孤独な生活を送るさまを言う。予想通り兼家も通つてこそ、一人の日常を送る。

件の六例は、当然ながらすべて道綱母の心情を綴る文脈だが、右に代表されるように、道綱母のその場面ごとの予想あるいは願いなどが前提としてある。それに即して「しるし」は「もしろく」の形で、はたしてその通りになったとその前提の実現のさまをより印象づけ、際立たせる言辭的用法として登場する。そこで、個々の思いの内容はそれぞれの文脈において明確に浮かび上がるため、「しるし」が文脈に応じた具体的意味内容と不可分という特性はここでも認められる。従つて、問題の「しるきこと」もそこに特定の具体性が込められたと考える方が妥当であらう。

「しるし」が個別の意味のなかでも特に子供の誕生に結びついて解釈されるのは、「宇津保物語」にとどまらず、以

後の作品へと続く。

まことに御心ち例のやつにもおはしまさぬは、いかなるにか、と人知れずおぼす事もありければ、心うくいかならむとのみおぼし乱る。暑きほどはいとゞ起きもあがり給はず。三月になり給へはいとしるきほどにて人々見^(注1)たてまつり咎むるに、あさましき御宿世のほど心うし。

(『源氏物語』若紫・一 一七七頁・一七五)

月日のすぎ待まゝに、いかにもてなし奉るべきかと、又いひ合する人も侍らぬまゝに、たゞ朝夕心ひとつをみだり給へる程は推はからせ給へ。なげきあつかはれ給ふ程などは、をのづから、きこしめしあはすらむかし。いまや、人しるく見奉らんと、しづ心なく思給へるほどは、うらめしかりける御契の程は、いかばかりかは心憂く見奉る」など言ひいでたるに、あさましく、むねもいとゞせきみだるゝ心地して、(『夜半の寢覚』巻一・九五頁)かくいふ程に、この女君は、たゞならずなりにけり。うちはへて物思ひに、ありし様にもあらぬ気色を、誰もたゞ「この出立を、なげき給へる」と思に、しるき事もあるを、乳母見知りて、「あな、いとおしや。かくさへなり給へるを、いかゞせさせ給はんとする。君に、なほ聞えさせ給て、御気色にこそ従はせ給はめ……」

(『狭衣物語』巻一・九二頁)

『狭衣物語』には右以外にも二例あり、「しるし」が懷妊の意を固有に獲得しつつあるさまが見受けられる。『蜻蛉日記』の「しるきこと」はこうした流れのなかにある。

では、次に文脈を考慮したとき、当該箇所にはたして私見通りの意味が要請されるのだろうか。

三、養女迎への「しるきこと」

ここで想起すべきはこの記事の主題、すなわち養女迎えてあるう。冒頭の引用文の前には道綱出世の夢占いの記事が配される。この天禄三年二月関連の記事が必ずしも時系列的配列を取らず、その構造に施された物語的虚構性をくみ取る読み方が論議されている。^(注2)が、本稿はその構造をめぐめる問題ではなく、そこに置かれた話柄そのものに注目する。

長くなるが、養女迎えが持ち出されるにいたる部分の本文を引用する。便宜上ABCの三段に分ける。

A 法師のもとよりいひおこせたるやう、「いぬる五日の夜の夢に、御そでに月と日とを受けたまひて、月をば足の下にふみ、日をば胸にあてていだきたまふとなん見てはべる。これ、夢解に問はせ給へ」といひたり。いとうた

ておどろくしと思ふに、うたがひそひておこなること
ちすれば、人にも解かせぬ時しもあれ、夢あはする物来
たるに、こと人のうへにて問はずれば、うべもなく、「い
かなる人の見たるぞ」とおどろきて、「みかどをわがま
に、おぼしきさまのまつりごとせん物ぞ」といふ。「さ
ればよ、これが空あはせにあらす、いひおこせたる僧の
うたがはしきなり。あなかま、いとにげなし」とて、や
みぬ。

B 又あるもののいふ、「この殿の御文を四あしになすをこ
そ見しか」といへば、「これは大臣公卿いでたまふべき
夢なり。かく申せばおとこぎみの大臣ちかくものしたま
ふを申すとぞおぼすらん。さにはあらす、きんだち御ゆ
くさきのことなり」とぞいふ。

C またみづからのおとゝひの夜みたる夢、右の方のあしの
うらに、をとゝかどといふ文字をふと書きつくれば、お
どろきてひき入ると見しを問へば、「このおなじことの
見ゆるなり」といふ。これもおこなるべきことなればも
のくるをしと思へど、さらぬ御族にはあらねば、わが一
人もたる人、もしおぼえぬさいはひもや、とぞ心のうち
に思ふ。(一四六段・一七五頁・下・天禄三年二月)
これらの夢は前段(一四五段)で夫兼家の右近衛大将とし

ての盛装に接した後、我が子道綱の出世を祈念するかのよう
に綴られる。右の記事に標題をつけるとすれば「道綱出世の
夢」となる。A 石山寺の僧の夢、B あるもの(女房)の夢、
C 自らの夢、と二つの命題に沿つた三つの夢が並列される。
換言すれば、この三つの夢は右の命題に括られる格好となる。
そして話題は次へと転換される。

実の娘のいない道綱母は現実問題として、自らの最期を実
際に看取る役目の子供の獲得を検討し出す。つまり、あらた
な記事の標題は「養女迎え」となる。以下は、右の引用の置
かれ、冒頭引用文へ繋がる一四七段の叙述。

かくはあれど、たゞ今のごとくにてはゆくすゑさへ心ほ
そきに、たゞ一人おとこにてあれば、年ごろもこゝかし
こにまうでなどする所には、このことお申つくしつれば、
今はましてかたかるべき年齢になりゆくを、いかでい
しからざらん人のをんな一人とりて、うしろみせん、
一人ある人をもうちかたらひて、わがいのちのはてにも
あらせんと、この月ごろおもひたちてこれかれにもいひ
あはずれば

「殿のかよはせたまひし源宰相かねたゞとかきこえし人
の御むすめのはらにこそ、女君いとうつくしげにてもの
したまふなれ。おなじうはそれをやさはさやうにもきこえ

させ給はぬ。いまは志賀のふもとなん、かのせうとの
禪師の君といふにつきてものし給なる」などいふ人ある
ときに、

『a そよや、さる事ありきかし。故陽成院の御のちぞか
し。宰相なくなりてまだ服のうちに、例のさやうのこと
聞きすぐされぬ心にて、なにくれとありしほどに、さあ
りしことぞ。人はまづその心ばへにて、ことにいまめか
しうもあらぬうちに齡などもあうよりにたべければ、女
はさらんとも思はずやありけん。されど返りことなどす
めりしほどに、みづからふたゝび許などものして、い
かでにかあらん、単衣のかぎりなんとりてものしたりし
ことどももありしかど、わすれにけり。(以下、冒
頭引用文へ続く)

養女の候補に挙がったのは兼家が普通つた女性との間に生
まれた娘であつた。記事の要点だけまとめると次のようにな
る。

道綱母、養女迎への願ひ抱く。
(この月)ころ思ひ立ちて)

女房よつて養女候補の名挙がる。

(殿のかよはせたまひし源宰相かねたどとかきこ
えし人の御むすめのはらにこそ、女君いとうつづく

しげにてものしたまふなれ
道綱母、昔の記憶を思い出す。

(そよや、さる事ありきかし)

ここで、特に問題の 冒頭引用文と併せて更に詳しく見
てみよう。

道綱母の記憶蘇る。以下、『内は道綱母自身の語り。

『a 兼家と兼忠女との交際始まる。

挿話 単衣のかぎりなんとりてものしたりしこと

歌の贈答 (記事中に「しるきこと」あり)

b 兼家と兼忠女の仲絶える。

c 兼家、女子誕生を告げる。』

養女迎え実現へ。

先の三つの夢が「道綱出世の夢」という主題に貫かれた語
りの構図を見れば、次のこの記事は「養女迎え」を念頭にお
いた話柄とできよう。この大きな枠を思い出すとき、そこに
叙された「しるきこと」も当然それに合わせて読み解かれる
べきではなからうか。(主題が「養女迎え」というと、諸注
釈書にある便宜的に分割された章段の標題などに引きずられ
ての論との印象を与えるかもしれないが、当然ここでいう主
題はあくまで連綿と続く作品本文から結果として浮かび上が

たものであることを断っておく。

それは先に挙げた『宇津保物語』のようなもの、つまり懷妊あるいはその兆候を意味するものをにおいて他にはないであろう。本文では「しるきこともなくてやありけん」とある。交際中に懷妊の事実はなく、兼家は別離後に知った事実として「ありしところに女子うみたなり。さぞとなんいふなる。さもあらん。」と道綱母に告げ、懷妊の有無への関知について整合性のある発言をしている。

従来の解釈ではその意は言及されないが、道綱母が記したこの「しるきこと」は文脈上そこまで踏み込んで読まれるべき必然性があるように思われる。そうでなければ「養女迎え」が先の「道綱出世の夢」と引き較べ、その主題との乖離が生じた記事となるためである。

従来の解釈に従えば、道綱母が綴る兼家と兼忠女の描写からは子供に関わる記述は一切ない。二人の恋愛話と贈答歌が語られ、別れた後初めて女子が誕生したと判明する。しかし、その流れで話題を追うと肝心の主題が一時途切れてしまふ。たしかに、両親の恋愛なのだから、養女と全く無関係とはいえない。しかし、従来の解釈のままであれば、展開された話自体から養女に繋がる線は全く浮かばない。単衣といひ贈答歌といひ、養女とは切り離された部分で恋のやりとりはなさ

れている。父と母の恋愛譚という異質物を挟んだ後、突然主題にかかわる養女誕生が「のちにきゝしかば…」と顔を出しているといつてもよい。直前に破綻のない叙述で一つの主題が描かれた点を留意すると、この部分のみが主題に関わらない目的性のない叙述である点是不自然と言わざるをえない。しかし、従来のように「目立ったこと」と単純に捉えるのではなく、子の誕生の有無に関わらせて解釈すると、この場面が主題から逸れることはなくなる。逆に、養女を迎えるというその一点に絞られた語りの文脈であることがわかる。道綱母は単に兼家の恋愛話を語ったのではなく、すべて自分が迎える養女の紹介、その出自を読者に詳らかにするためにこの場面を用意したのである。このことは、同時に、改めて『蜻蛉日記』の叙述が明確な主題意識に支えられたものといふ認識を読む者に促していよう。

四、兼家の「さもあらん」

さて、この一連の記事で、兼家の「さもあらん」という発言をめぐって疑問を抱く解釈がある。「かなり無責任な、突き放した物言い」と評す注が^{注1}それである。この発言について、「そうかもしれない」「そうもある」というのが注釈の大勢

であり、それ以上の解釈を附したのは右のものに限られる。単純な直訳ではなく、兼家の口吻をより具体的に肉付けしようとした姿勢は評価されるべきだが、一方で、はたしてその解釈が妥当なのかという疑念を感じる。

いったい、別離した後子の誕生を知った人の発言として「さもあらん」は無責任を表すのだろうか。本文では、兼家が兼忠女の出産を知ったのは「はかなうなりはてにしお」と明記される。加えて先に言及した通り、交際中「しるきこと」すなわち懐妊はなかったとあり、本文の「女子うみたなり」「さぞとなんいふなる」を見る限り、兼家がその懐妊および出産を直接目のあたりにしたわけではないと知れる。^(注1)

右の状況を考えると、別離後判明した事実に対し兼家の先の発言は文字通りの感想に過ぎず、そこにそれ以上も以下も意味をくみ取るための根拠は示されていないように思われる。憶測するに、「無責任な、突き放した物言い」という解釈の背景には、子の誕生に対し父親は責任をとるべきという無意識の倫理観があるのでなからうか。しかし、子は母方に属して養育されるのが一般的であった時代、加えて関係が断絶した後その誕生を知ったという事実を斟酌すれば、この発言を無責任か否かという次元で云々することは困難に思われる。兼家の発言は額面通りの意味にとどめるのが穩当である。

う。たしかに女性にとつて「無神経」な発言かもしれないが、「無責任」なのかを少なくともこの部分から判断するのは慎重を要しよう。

子の処遇をめぐり、道綱母への「ここに取られてやおきたらぬ」という申し出を考えると、兼家は無責任一辺倒ではない面も見せているように思われる（その後その話は消滅し、兼家が養女の面倒をみたわけではないので、結果的には「無責任」の誹りは免れないかもしれないが）。実際、兼家が我が子の誕生にあたり不熱心だったとはいえない姿が日記には散見する。道綱母の出産に際し「なほもあらぬことありて、春夏なやみくらして八月つごもりにとかうものしつ。そのほどの心ばへはしもねんごろなるやうなりけり。」（上・十段・天曆九年一 八月）、また町小路女の時も「この時のところに、子うむべきほどになりて、よき方えらびて、ひとつ車にはひのりて、一京ひぎつぎきていと聞きにくきまでのしりて、この門のまへよりしも渡るものか。」（上・天徳元年・夏）とある。兼家の町小路女への寵が衰えるのはこの後であり、その理由が、生まれたのが実は「親王の落し胤」であったと仮にするなら、兼家の豹変も故なきことではない。

子の誕生時における兼家の態度は別に検証されるべき問題であらう。^(注2)

五、まとめ

養女迎えという『蜻蛉日記』の主要な話題の一つの中で、「しるきこと」はこれまでの解釈においてさほどの関心は払われていなかった。その理由は、「しるきこと」が含まれる兼家と兼忠女との回想記事が恋愛譚として一個のまとまりを見せていたためと思われる。つまり、恋愛譚に目がいくあまり、この記事が導き出された本来の目的が一瞬忘れられた結果と考えられる。

「しるし」が用いられる時、その場合場合にに応じて様々であるとはいえ、何が「しるし」なのか、その対象は常に前後の文脈から明確に浮かび上がってきた。「しるきこと」の場合、養女を迎える記事という基本に立ち返ると「兼忠女による養女の懐妊」が文脈の要請として浮かび上がる。もしそう読まなければ、この語を含むこの文脈は養女を紹介する記事のなかで、養女にはつながらない部分での父と母の恋愛、すなわち主題から外れた挿話、記事のなかの異質物と化そう。

「しるし」がそこに在って今まで送り続けた信号は、この天禄三年二月の記事が強い主題性に導かれ、またそこに収斂する叙述であったことのさりげない、しかし確固とした示唆

であった。そして同時にそれは、『蜻蛉日記』に現れた作者の基本的執筆意識がかいま見られた場でもあった。

(一)

注

注1 『蜻蛉日記』本文は、『新日本文学大系』に依る。以下、章段番号・頁数・巻・年次を付す。

注2 A系本文に較べ祖本から隔たるとされる(『蜻蛉日記校本・書入・諸本の研究』(上)村悦子著 古典文庫 昭和三八年一〇月)B系本文の大東急本・萩野本「しかき」。彰考館本は「しかき」とあり、「か」に見セケチ、右傍に「る」朱書。無窮会本「しりき」、京大本「しなき」。祖本に最も近いとされるA系本文が共通して「しるき」とあるため、本稿は「しるき」を尊重する。

注3 『蜻蛉日記』与謝野晶子訳 今西祐一郎補注 平凡社ライブラリー141 平成八年三月。

注4 「日知りの裔の物語」『源氏物語』の発端の構造 「火山列島の思想」筑摩書房(昭和四三年七月)、ちくま学芸文庫(平成五年一月)。

注5 本文は『日本古典文学大系』に依る。

注6 以下、和歌の引用は『新編国歌大観』に依る。

注7 本文は『日本古典文学大系』に依る。

注8 本文は『日本古典文学新全集』に依る。

注9 『うつほ物語全』室城秀之校注 おうふう 平成七年十月。

注10 この他に「いちしるき」が一例。

九月になりて、「世の中をかしからん。ものへ詣でせばや。

かうものはかなき身のうへも申さむ」などさだめて、いとしのびある所にもしたり。一はさみの幣帛にかうかきつけたり。まじ下の御社に、

いちしるき山ぐちならばこゝながら神のけしきをみせよとぞおせむ。

注11 各本文は以下に依る。『新日本古典文学大系 源氏物語』。『日本古典文学大系 夜半の寢覚』。『日本古典文学大系 狭衣物語』。

注12 木村正中「蜻蛉日記下巻における物語性の文体論的考察」(『文学・語学』第四五号・昭和四二年九月)同「古物語の超克 源氏物語への階梯」(『國文學』昭和五六年一月)、金子富佐子「蜻蛉日記下巻『養女迎え』の記事における物語性について」(『中古文学』第四九号・平成四年九月)、堤和博『蜻蛉日記 下巻の物語的手法とその限界 夢と養女迎えの記事』(『言語文化研究』(徳島大総合科学部)第六巻・平成十一年二月)など。

注13 新潮集成本(犬養廉校注)一九四頁頭注三。
注14 直接見たと考えられる場合は、たとえば次のように描かれる。

「うしろのくにむつはるはるとありて、えまいらぬを、きのふなん平らかにものせらるめる。けがらひもや忌むとてなむ。」(二三段・五三頁・上・天徳元年夏)

助動詞「なり」「めり」は現在次のように説明される。

「なり(伝聞推定)」「が」「鳴り」「音」に通じる音であって聴覚にかかわる内容があるのに対し、「めり」が引用者注(視覚にかかわる形で成り立ったことは推測できる。)(『日本語文法大辞典』(明治書院 平成十三年三月)「めり」(山口

明穂)「変遷」項・七七九頁)

注15 岩波文庫本(今西祐一郎校注)四四頁脚注一〜二。

注16 他の資料に散見される「さもあらん(む)」「も前の文章の内容を承けるという役割にとどまるようである。一例として『宇津保物語』(前掲注9・「内侍のかみ」四一六頁)。

「琴は、もし母方の外戚こそ、かの俊隆の朝臣の琴は仕うまつらめ。それを、さるべき筋の、さらに侍らねばにやあらむ」と奏す。「よし、それはさもあらむ。やむことなき朝臣として、移し伝へたる人なしや。」

(かわはらだ ゆつこ・本学大学院博士後期課程)